

マイクロメートル寸法測定

マイクロマシン（マイクロは100万分の1）という用語を知ったのがちょうど20年ほど前だったか。大学院で与えられた研究テーマがマイクロメートル寸法の材料の強度問題であった。しかしまさかそのテーマと今日までお付き合いすることになるとは考えてもみなかった。

スマートフォンのモーションセンサーやマイクロホンなど、電子機器デバイスという形でさまざまなマイクロマシンが身の回りにあふれている。マイクロマシンの基幹部、例え

凛としていきる

理系女性の挑戦

3つの転機で人の助け



ばモーションセンサーの重りを支える梁などは髪の毛の10分の1以下の大きさで、シリコンで作られることが多い。そのシリコンの強度をマイクロメートル寸法で測定している。

しかし学生時代に学んだ「今更シリコンを調べてどうするの」

たない自分の研究がなるとなく面白くなかった。

しかし、三つの転機を経てその考えは大きく変わった。細々と続けていたあるとき、研究室の後輩が「この実験結果見てください」とやってきた。初めて見るシリコンの壊れ方だった。研究の余地がある奥深さに改めて引きつけられた。

それでもテーマを更するか迷っていたが、ある教授に悩みを打ち明けたとき一言いただいた。「極めればいい」。長い間研究に携わってきた方の言葉はシンプルであったが自分の中にしっくりと落ちて、突き進むという前向きなモチベーションとなった。

そして異動した立命館大学にはマイクロマシンの研究者を始め、学科や学部の枠を超えて研究者と交流できる風土があった。多分野交流は、新たな知識とともに材料強度の重要性をより深く認識する機会をもたらした。

横のつながりは宝物（立命館大の3研究室、前列左から4人が安藤さん）

三つの転機すべてに言えることは人の助けがあったことだ。長年一つのテーマと付き合い続けてこられたのはさまざまな人に出会えたおかげであり、その感謝

の気持ちを忘れずこれからも続けていきたいと願う。

企画協力・日本女性技術者フォーラム（JWEF）

（火曜日に掲載）

立命館大学理工学部機械工学科准教授 安藤 妙子

△▽

△プロフィール▽01年名古屋大院工学研究科博士課程後期課程修了。日本学術振興会特別研究員、名古屋大助教、講師を経て09年より現職。博士（工学）。

